

サンタより愛を込めて

作 : 岡崎道成

演出 : 小川政弘

★登場人物

サンタクロース

妻アンナ (& ナレーター)

息子チャーリー

電話の男

受付嬢

クミ

<前編>

ーTELのベル

アンナ 「もしもし…。ええ、そうですよ。ええ、はい、青い目のフランス人形。大きさはー50センチ位ので。お名前とお所はーレイモンドさん、ニューヨーク市、…はい、はい、わかりました。ええ、もちろんクリスマスイブの晩に。はい、どうもありがとうございます。」

ー受話器置くー

アンナ 「おお寒い。あの人、大丈夫かしら。」

N そろそろ帰ってくるだろう夫の身を心配しながら、私は暖炉のくべてある家の中へ戻りました。私の名前はアンナ。夫は今、子供たちにプレゼントする品物をあちこち仕入れに行っているのです。何のプレゼント？もちろんクリスマスプレゼントですよ。夫はサンタクロースなんですから。私たち夫婦がどこに住んでいるか、それは秘密。四方を木々に囲まれた、それは素晴らしい所ですよ。南はカエデ、北は松、西はブナ。そして東は、クリスマスツリーにするために夫が何年もかかって育てたモミの木。でも、一人息子のチャーリーは、10年前にここを出て行ってしまいました。サンタクロースの仕事を継ぐのがいやだったんでしょう。確かに大変な仕事です。でも、素晴らしい仕事ですよ。夫はプレゼントを届けた子供たちの事をみんな覚えているんです。さっきの電話は初めての人だったけど、昔の子供たちが身の回りの事を知らせてくることもあるんですよ。

—そりの音。玄関開いて—

サンタ 「ただいま、アンナ。」
アンナ 「お帰りなさい。寒かったですよ。」
サンタ 「何、慣れとるからな。」
アンナ 「あなた、ちょっと前にまた一つ注文がありましたよ。フランス人形ですって。」
サンタ 「そうか。じゃあ次の仕入れのときに取り替えることにしよう。」
サンタ 「ああ、わしが出るよ。あー、もしもし。ああ、マイヤーさん、ベルリンの。ハイネちゃん元気かね。ああ、去年のオルゴールが。それはよかった。うん？日曜学校に？そりゃあ何よりだ。ええ、ええ、あっはっは、かわいいのう。いやいや、わしもうれしいですよ。ああ、ありがとう。それじゃ。」
アンナ 「あなた、ハイネちゃん、日曜学校へ行ったんですか。」
サンタ 「ああ、今年に入ってからずっと続いているそうさ。去年オルゴールを届けたじゃろ。あの曲を教会で歌うのがとっても楽しみなんじゃと。」
アンナ 「確か『きよしこの夜』でしたね。そうですか。じゃあ、そろそろあなたともお別れかしらね。」
サンタ 「そうじゃな。」

N イエス様にお会いした子供たちには、サンタクロースの役目は終わりなのです。夫は少し寂しそうです。卒業する生徒を見送る先生のような気持ちなんだと思います。

サンタ 「もしもし」
男 「あ、もしもし、クーポン2枚頼みたいんだけど。」
サンタ 「クーポン？何のクーポンでしょう。」
男 「何のって、ホーリーナイトクーポンに決まってんじゃん。クリスマスイブにホテルロマンチックに泊まれて、ディナーも付いてるやつ。」
サンタ 「クリスマスイブに？そういうのはやってないんだがね。」
男 「え、だってサンタクロースだろ、おたく。」
サンタ 「サンタクロースだから、やってないんじゃよ。」
男 「あれ、だってキャンペーンやってんだろ、今。彼女と行くんだからさ、頼むよ。もしかして、もう予約いっぱい？」
サンタ 「何かの間違いじゃないのかね。サンタクロースというのは、子供たちにプレゼントを届けるのが仕事だよ。ホテルのクーポンなんか、やっとなんのだがね。」
サンタ 「もしもし、もしもし、何じゃ、失礼な人じゃな。」
アンナ 「どうしたんですか。注文じゃないんですか、今の電話。」

サンタ 「うん、注文は注文なんじゃが、どうも訳が分らん。一体クリスマスは何だと思っとらんじゃ。」

N その電話の数日後の事でした。夫はいつものように、トナカイのそりに乗って品物の仕入れに出かけたのですが、その帰りに森の上を飛んでいるとき、大きな建物を見つけたそうです。

サンタ 「うん？森の中にあんなビルがあるなんて。ふむ、なにかプレゼントにするのにいい品物があるかもしれんな。ちょっと寄ってみるとするか。それっ」

サンタ 「だいぶ新しい建物のようにゃな。なにになに、ホーリーナイトカンパニー…？うーん、どこかで聞いたような。あっ、そうじゃ、もしかすると…」

N 夫は数日前の電話に思い当って、その建物の中へ入って行きました。中ではたくさんの人が忙しそうに歩き回っていて、夫が入って行っても誰も気に留めなかったそうです。

サンタ 「ああ、あそこに受け付けの人がいる。あの、すみませんが。」

受付嬢 「いらっしやいませ。どんな御要件でしょう。」

サンタ 「つかぬ事を聞くが、ここはどんな仕事をする会社かね。」

受付嬢 「私共ホーリーナイトカンパニーは、あらゆるクリスマスギフトを取り扱う総合商社です。」

サンタ 「クリスマスギフト？クリスマスプレゼントを届けるのは、確かサンタクロースの役目ではなかったかな。」

受付嬢 「サンタクロースは、お子様向けの取り引きが主だと聞いておりますが。」

サンタ 「(独り言)何が取り引きじゃ」

受付嬢 「はい？」

サンタ 「いや、それで？」

受付嬢 「私共は、10代半ばから上のお客様を対象と致しまして、クリスマスギフトをお届けしております。」

サンタ 「では、ホーリーナイトクーポンとかいうのをやっているのも、あんたたちかね。」

受付嬢 「はい、それでしたら、私共がバレンタイン社と提携してロマンチックキャンペーンを行なっている、今年の主力ギフトでございます。」

サンタ 「バレンタイン社？あれはクリスマスとは何も関係もない会社じゃろうが。」

受付嬢 「あの、お客様、御要件は…」

サンタ 「…何じゃ、『リッチナイト・ムードナイト・ホーリーナイト』。あの壁の文字は何かね。」

受付嬢 「あれが私共のサービスの心構えでございます。」

サンタ 「で、誰がやっとなんだ。」
受付嬢 「はい？」
サンタ 「社長は誰だと聞いとるんだ。」
受付嬢 「社長はチャーリー・クロースと申しまして、サンタクロースの血を引く方ですが。」
サンタ 「な、何じゃと？チャーリー・クロース？」

N それは、もう10年も音沙汰のない、私たちの一人息子の名前でした。サンタ「社長に、チャーリーに会わせてくれ。すぐにじゃ。」

受付嬢 「それは困ります。アポを取って後日いらしていただかないと…。」
サンタ 「何がアポだ、社長室を呼びなさい、わしが直接話す。」
受付嬢 「お客様、やめて下さい、社長はただ今外出中です。」
サンタ 「外出？それなら仕方ない、帰ったらあれに伝えてくれ。父親が話があるとな。確かに伝えるんじゃよ。」

—サンタの家—

アンナ 「そう、チャーリーがそんな会社を。あの子、サンタクロースの仕事を継ぐのは嫌だってこの家を出て行ったのに、やっぱりクリスマスの仕事をやってるなんてねえ。」
サンタ 「じゃが、あれは違う。わしのとは違うんじゃ。あの会社には、どこにも…どこにも感じられなかった。わしが子供たちにプレゼントを届けるときの思いと通じるものがない。」
クミ 「もしもし、サンタさん、クミです。東京の、クミです。」
サンタ 「おお、クミか。覚えとるよ。8年前に聖書を渡したのが最後じゃった。元気かね。」
クミ 「サンタさん…あたし…うわーん」
サンタ 「どうしたんじゃ、クミ、クミ。泣かないで話してごらん。」
クミ 「彼が、彼が、別れようって。もうすぐクリスマスなのに…あたし一人になっちゃう。クリスマスなのに。うわーん」
サンタ 「そうか、それはつらいのう。でもクミ、クミは一人ではないじゃろう。クリスマスは、イエスが共にいて下さるのだから。」
クミ 「でも、友達はみんな彼と一緒になの。映画に行ったりレストランに行ったり。あたしは誰もいない。クリスマスイブに、一緒に過ごす人がいないの…うわーん」
サンタ 「クミ…」

N 夫はそう言ったまま、唇をかみしめました。目に見えぬ何かに向かって突き上げてくる悲しみと怒りに、白い髭を微かに奮わせながら。

<後編>

ーサンタの家ー

チャーリー「父さん、母さん、ただいま。お元気ですか。」

アンナ 「チャーリー!?!」

チャーリー 「父さん、驚きましたよ。僕があのかをやってること、どうして知ったんですか。」

サンタ 「・・・」

チャーリー 「父さん？怒ってるんですか、ずっと連絡しなかったこと。すみません、心配をかけて。でも、僕はこの通り元気ですから安心して下さい。」

アンナ 「さあさあチャーリー、そんな所に立ってないで、こっちへ来てお座り。母さんに顔をよく見せてちょうだい。」

N 私はアンナ。夫は、子供たちにクリスマスプレゼントを届けるサンタクロースです。たった今ドアを開けて入ってきたのは、一人息子のチャーリー。10年前にこの家を出ていった息子が大きな会社の社長をしていたのを、夫は偶然知ったのでした。

サンタ 「チャーリー、お前、いつからあのかを・・・」

チャーリー 「この家を出て5年ほどしてからです。初めからうまくいましてね、すぐ大きくなりました。」

サンタ 「なぜお前が、クリスマスプレゼントなんか扱っとる。」

アンナ 「あなた、何もいきなりそんな話をしなくても・・・。せっかく久しぶりに帰ってきたんですもの。」

サンタ 「お前は黙ってなさい。」

チャーリー 「それが一番僕に合ってたようです。やっぱり血は争えないんですかね。子供の時から、見たものといえばプレゼントの山とモミの木だけでしたから。父さんは子供たちにしかプレゼントを届けなかったけど、僕は、大人だっけきつと喜ぶに違いないって思ったんです。それで若者相手に始めてみたら、これが大当り。3年目にはあのかビルを建てました。注文はオンラインで瞬時にコンピューターに入力されるし、世界中の一流デパートと契約してどんなギフトでも揃います。クリスマスイブの真夜中の時報と共に、トナカイスクーターに乗ったサンタレディたちが一斉に空へ飛び立つさまは、壮観ですよ。」

サンタ 「お前は、サンタクロースの仕事を継ぐのを嫌がっていたんじゃないのか。」

チャーリー 「父さん、ぼくはここにいたとき、父さんみたいなやり方しか知らなかったんです。毎日毎日電話を受けて、イブの晩は重い袋をかついで配達。だけど都会に出て、もっ

と違ったやり方があるのに気付いた。父さん、父さんももう若くないんです。いい機会です。これからは仕事は僕に任せて、父さんはゆっくりして下さい。その方が母さんも喜びます。」

サンタ 「チャーリー、お前はわしの仕事を何もわかつらん。ああ、何もじゃ。」

チャーリー 「それはどういうことですか。」

サンタ 「アンナ、わしの首飾りを取ってくれんか。」

アンナ 「え、ええ。…はい、あなた。」

サンタ 「ああ。チャーリー、これが何かわかるな。」

チャーリー 「…十字架です。」

サンタ 「この十字架の首飾りは、わしが父親からサンタクロースの仕事を継ぐときに、その印としてもらったものじゃ。わしの父親も、そのまた父親も、そうやって受け継いできたんじゃ。」

チャーリー 「知ってますよ。子供のときから何度も聞きました。」

サンタ 「では、最初のサンタクロースは、これを神様からもらったということも、知つとるな。」

チャーリー 「…はい。」

サンタ 「わしらサンタクロースは、子供たちにプレゼントを届ける役目を、神様から頂いた。それはただ品物を渡すだけの役目ではない。プレゼントを通して、子供たちに伝えるものがあるんじゃ。親が子に、先生が生徒に、伝えるべきものがあるようにな。それが、この十字架じゃ。イエス・キリストの十字架なんじゃ。そしてわしらの相手は子供だけに限られておる。」

チャーリー 「…どうして。」

サンタ 「プレゼントを受け取った子供たちは、やがて成長してイエス・キリストが神様からのプレゼントだったことに気付くようになる。自分の罪の身代わりとしてのプレゼントとな。そうしたら、その子にはもうわしらは必要ない。クリスマスの本当の意味を知ったからじゃ。その子は、受ける方から、与える方に変わる。わしらは、子供たちが与える方に変わるのを邪魔してはいかん。でないと、自分が受けることばかり考える大人になってしまうんじゃ。」

チャーリー 「でも父さん、僕はクリスマスを素晴らしい一日にしてもらうために、この仕事をしてるんです。豪華な食事、ロマンチックな夜景、甘い雰囲気。誰もが平和で満ち足りた気持ちになる。そういう一日を過ごしてもらおうと思ってるんですよ。」

サンタ 「そのために、クミのような気持ちを持つ者がいてもか。」

チャーリー 「クミって、誰です？」

サンタ 「お前は、クリスマスを神様から奪って、自分の気持ちを満たすだけの日にしている。それが逆に、クミのような孤独な者を生みだしているんじゃ。そのことがわからんのか。」

チャーリー 「…いつも他人のことばかりだ。」

サンタ 「うん？」

チャーリー 「他人の子供のことばかり考えてるよ、昔から父さんは。」

サンタ 「何を言っている。」

チャーリー 「父さん、いつもクリスマスの時期になると、注文を取ったり品物を揃えたりしてた。イブの晩は子供たちにプレゼントを届けに行く。僕は、サンタクロースの一番近くにいたのに、クリスマスプレゼントをもらったことがない。父さんは他の子供のことばかり一生懸命で、自分の息子は放っておいたんです。それなのに…。僕は、自分が父さんから受けられなかった分を、人に与えてるつもりなんですけどね！」

アンナ 「チャーリー、何てこと言うの！父さんに謝りなさい！」

チャーリー 「…」

アンナ 「もしもし。はい、そうですけど。え、社長って…」

チャーリー 「会社からだ、母さん。もしもし、ああ、私だ。どうした。うん、何だって!?…全部か。…わかった、とにかくすぐ戻る。」

アンナ 「会社で何かあったのかい、チャーリー。」

チャーリー 「山火事です。会社がクリスマスツリー用に買い付けたモミの木の山が、全部灰になったって。ロンドンの大通りのイルミネーションに使うつもりだったんです。今月中に 1000 本以上引き渡しがあるのに。何てことだ！」

アンナ 「それ、渡せなかったらどうなるんだい。」

チャーリー 「会社の信用問題ですよ。代わりをどこかから調達しないと。どこか…そうだ、父さん、うちの東側のモミの木、まだありますよね。」

アンナ 「チャーリー、お前あれを…」

チャーリー 「父さん、お願いします。あのモミの木を使わせて下さい。」

サンタ 「…」

チャーリー 「大勢の人が楽しみに待ってるんです、父さん、お願いします」

アンナ 「チャーリー、あのモミの木は父さんがね、あ、あなた、どこへ行くんですか。」

サンタ 「木を見に行く。チャーリー、ついて来なさい。」

チャーリー 「えっ、それじゃあ…。あ、僕のトナカイスクーターで行きましょう。その方が速いからです」

N 二人は、チャーリーが乗ってきた乗り物で、東へ向って飛んで行きました。

—上空を飛びながら—

チャーリー 「いやあ、ずいぶん広いですね。植え方はばらばらだけど、これなら十分足りりますよ。父さんが何年もかけて育てたモミの木をすみません。父さんからの初めてのクリスマスプレゼントですね。」

サンタ 「チャーリー、このモミの木は、ずっと前から全部お前のものなんじゃよ。」

チャーリー 「えっ？」

サンタ 「下をよく見なさい。」

チャーリー 「下を？でも、モミの木が落書きみたいに植えてあるだけで、何も…。うん？違う、落書きじゃない。文字みたいだ。C、H、そうだ、文字だ。C、H、A、R、L、I、E、チャーリー、チャーリーだ！」

N チャーリーは、私たちが年をとって初めて与えられた子供でした。夫も私も、あのときはどんなに神様に感謝したことか。そして夫は、あの子の名前を型取って、あのモミの木を一生懸命植えたのです。もちろん、首に十字架の首飾りをつけて。あの子に気付かせるのが少し遅くなってしまったけれど、でも、これであの子も、与える方に変わることができるでしょう。人々に本当に必要なものを与える者にね。あの子にもやっと、サンタクロースが訪れたんですから。ー日本の、そして世界中のあなたにも、今日は素晴らしいプレゼントをしたいんです。あなたのために今宵、人となられた神の御子イエス様を。サンタより、愛を込めて。

<完>
